とめに死の徴候がまだ現われぬ前、戦争の残虐行為への憎しみの意識はいちだんと尖鋭化していて、見舞客の誰彼をつかまえては、身の毛もよ立つようなか細い声でとめはこう訴えるのが常であった。
「……なア、こんな罪咎（つみとが）もない可愛い子が何で殺されんならんのですやろ……万之助はそれはそれは気立てのやさしい子でした。あれは小学校のときでしたかなア、野の虫にも親や子もあるのやから、先生に叱られてもええ、宿題の昆虫採集はでけんちゅうてとうとうやらんじまいじゃった。出征の前の晩なんか、わたしの布団にはいってきて、今生（こんじょう）の思い出に母さんのお乳を吸わしてくれというて、このしなびたお乳を吸いよるんじゃがな、とてもとても万之助は鉄砲持って人殺しのできる子じゃなかったで……」
俊介はそのころから、とめに気づかれないようにそっととめの声を丹念にテープコーダーに録音していた。
「……万之助や、万之助！　いまにわたしもおまえのところへまいらせてもらうからね……もうちょっと待っといておくれ……」
とめは譫言（うわごと）の状態で昼夜をわかたず、同じ文句を繰返したものだった
――。
重ったい痰で咽喉をつまらせながら、蒼黒く浮腫（むく）んだ顔をゆがめながら最愛の息子と別世界での団欒を望むのあまり、一刻も早い生命の終焉を自ら祈るようなとめの叫喚は哀れでならなかった。
そして、とめが柩車のきしみの音を聞くようになり、カワラケツメイやドクダミの繁茂する、いつもじめじめとしめったあの薄暗い靄に包まれた墳塋(おくつき)を意識し出すころになると、
「息子をかえせ！　……息子をかえせ！！　……」
の、とめの絶叫は、前にも増して、鋼鉄(はがね)のごとき冷たさと鋭さを加え、「……息子をかえせ」のただ一点だけにしぼった悲しい死の前奏曲をなんども繰返すのだった――。

## ⑪　加藤静枝「生かされて　六十首」抄（『ルソン哭泣　従軍看護婦の手記』私家版、平成八年）

髪と爪を母に送りて従軍せり四十三年前看護婦として

力つきて落伍せる君と別れ来しルソンの山を今も思ひぬ

坑道は水漬き寂しくしずまりぬ日も見ず逝きし傷兵あはれ

シスター等の散らばる遺骨七百体厚く葬りしを涙して聞く

モンテンルパの刑場に果てし兵の孫来春嫁ぐと便り届きぬ

一部屋に大腿骨折の傷兵十九名はたちの我を「母ちゃん」と呼びき

四十六年前始めて看護を受持ちし傷兵二人笑みて我を待つ

傷病軍人となりし二人が湯の宿に貫通銃創の痕を我に見す

ルソンの山の屍七百ねむごろに葬り給ひきシスター海野

ルソンの山に薊の根をも食べたりき牛蒡に似し匂ひに故里恋ひき

仏壇の引出しに見つ母宛のルソン収容所の我の手紙を

戦争は死ぬ方が易いと思ひ出づルソンの山に逃れき我は

ルソンの山に死すべき命ながらへて子を生み育て孫も見得たり

落盤の大きな岩石は傷兵らを埋めてをりきビックイッチ金山

生きながら坑道の闇に入れられて果てにし傷兵思ひ出づるも

日々に増す餓死せし遺体をトロッコに重ね積み上げ坑口へ運びき

五十年経て懺悔の言葉かなしけれビックイッチ金山に兵ら死なしめしこと

白衣脱ぎ菜葉服にてゲートル巻き軍靴を履きて夜道のがれき

谷の水に首すぢぬぐひ汚れたる黒髪切りき吾二十三歳

赤十字の屋根のマークを目標に爆弾投下され吹飛びし病棟

懐中仏をわが征く際に下されし母の心を今にし思ふ

戦終りジャングルの中に落伍せし中条婦長餓死したまひき嗚呼

養生村に浴衣を着せて埋めたり吉川看護婦あはれ二十一歳

五十年経て従軍記書かむと吾が思ふ今しかないと心せきつつ

**作者プロフィール　加藤静枝**（大正十三年〈一九〇四〉～平成二十四年〈二〇一二〉）現・桑名郡木曾崎町生まれ。昭和十七年（一九四二）一月、赤十字病院に勤務中に召集令状を受け、フィリッピンへ。戦後帰国し、結婚して四日市川原町に移居。後に「四日市ぜんそく」となり公害患者に認定された。闘病しながら昭和五十八年から「三重アララギ」に、次いで「アララギ」に入会して作歌に精励。平成八年、常磐井猷麿序の『ルソン哭泣　従軍看護婦の手記』を出版。

## ⑫　辺見じゅん『男たちの大和』抄（『男たちの大和』角川書店、昭和五十八年）

内田貢は、意識が朦朧となったまま、人々の入りまじった佐世保の海軍病院の片隅に、忘れられたように横たわっていた。内田が意識を取り戻すのは、脇腹に注射針を無造作に差し込まれるときである。そのときだけは、わずかに意識を取り戻した。しかし、何をされているかはわからなかった。内田はものも言えなかった。

内田の軀（からだ）は、全体が異様にゴム人形のようにふくらんでいた。右足は太股（ふともも）から第二関節へ弾が貫通、右肩から左肩に、首の後ろから腋の下に、また胸にも無数の鉄片が食いこんでいた。その上、肋骨は左六本、右二本が内側に折れ、生きているのが不思議な状態だった。

内田は丸太にくくられて海へ入った。だれが丸太にくくりつけてくれたのか内田の記憶にはなかった。

内田は海に引きずり込まれ、気がついたときには海中に漂っていた。かなり長い間気を失っていたのか、「大和」の爆発も知らない。喉をやられていたことがかえって幸いしたか、ほとんど海水を飲んでいなかった。

海の上で、内田はくるくる軀が動いた記憶がある。内田は左腕を丸太にくくりつけられていた。右腕は怪我をしていたが、無意識に動かしていた。内田の軀に兵隊の死体がぶつかった。海中で死体はかたまりあった。彼の右手は死体のバンドを引き抜き、丸太に自分の腕をしばりつけた。

内田はどのようにして救助されたかも、駆逐艦の艦名も覚えていない。のちにいろんな人から聞いてみると、内田が助けられたのは「冬月」ではないか、という。救助されたときにものも言えなかった内田は、だれかが戦闘服のネームを見て、唐木か、と言ったのをおぼろに記憶している。佐世保だったかで、